

宗教言語の翻訳 ④

語りえぬものとメタファー

宗教言語は、特定の神、超越的存在やそれらに関する個人の覚醒、神秘体験を第三者へ伝える役割を担っている。しかしその対象は言表困難であり、人知をはるかに凌駕する。この点に関し、エイヤーは次のように指摘する。

「あるものが人間の悟性力を超える」ということは「それが理解できない」ということである。そして理解できないものは有意味に記述することはできない。……「神は純粋に神秘的な直観の対象であり、それ故理性に理解出来る言葉では定義されえない」。(エイヤー、吉田訳、1955:148)

宗教言語の対象は、人知によって理解しうる、あるいは客観的に検証しうるものではない。つまり、それはあくまでも信仰の対象であり、理性的な対象ではない。したがって、言語によってそれを定義することは不可能であるという。本号ではこの問いについてメタファー（隠喩）との関係から考えたい。

メタファーは、meta「超越」、pherein「運ぶ」という言葉を起源に持つ。通常、隠喩と訳される。これは特定の語を用いつつ、その語の関連性や類似性から異なった意味を提示する表現方法である。たとえば「神の手を持つ医師」という場合、その医師は実際に神の手を持っているわけではない。しかし、「神の手」は、卓越した技術、超次元的能力を持つメタファーとして、まったく別の意味を提示する。

宗教言語においても、このメタファーは重要な役割を担っている。名前のつけようのない概念や存在、そしてその体験などを語る際、それに関係するモデルを提示し、メタファーを用いる。どのような宗教言語であっても、メタファーを含む比喩的用法なしには、その対象を指示しえない。

また、「聖なる言葉」によって指示される内容や概念は一つであるとは限らない。「神」を語るうえでメタファーは、語と対象の対一の二項対立の構図とその関係性からの解放という、認知的可能性を提示する。そして限界性を伴う言語によって「神」について語るという、教学あるいは神学の根幹に関わる、じつに根源的な課題をも明確にしつつ、そのジレンマを克服する手段となる。

メタファーは言葉のあやであり、それによって一つの事柄を語りつつ、他のものを連想させるように見えるものである。(ソスキース、小松訳、1992:45)

ソスキースは、このようにメタファーを定義し、科学言語と宗教言語におけるメタファーの使用の比較を試みた。科学理論の構築においては、未知なる物質を現実存在していると仮定し、言葉と概念を作り上げる。「遺伝子」や「原子」など、それらが未知の段階においては、メタファーを用いつつ、それに類似するものから論じられ研究される。同じように宗教的メタファーによっても、「語りえぬもの」を特定のモデルから新たな視点や概念として提示しうるとした。

さらに宗教言語のメタファーに関して、サリー・マクファグューはその機能に注目した。宗教言語の場合、そのテキストを字義通りに解釈することは「偶像崇拝的」となる場合もあり、それを宗教言語特有の問題であると考えた。さらに、宗教言語のテキストは、その時代や文化に根差すがゆえに、その束縛から免れない面もあるとも指摘している。そのような束縛により、時代の経過とともに現代社会にまつわる様々な課題や苦難に対する明確な答え

を提示できなくなる場合がある。その結果、宗教言語はその有効性を失ってしまうとも述べている。そこで、硬直化した宗教的モデルをメタファーによって通時的共時的に刷新し、新たな解釈の可能性を見いだす「メタファー神学」を提唱している。たとえば、「父なる神」というメタファーが、今日的な文脈において、もし仮に父権主義的な神（父＝神＝男）と幼児的な人間という構図を描写するならば、神という概念の諸断片を抽出し、「友なる神」など、それに代わる新たな神のモデルを提示することも必要であり、「友なる神」というメタファーからは、苦悩を共に分かち友人のような共苦の神としてのモデル構築に成功するとも指摘している (McFague, 1983:177-192)。

このような指摘は、宗教的象徴に関してティリッヒが、「重要なことは、一つの表象を他の表象をもって代えるということではなく、このような置き換えが表現する実在の見方の変化である。」(ティリッヒ、土居訳、1984:17)と指摘している点に通底すると考えられる。メタファーが、共通基盤である社会的文脈に依拠しつつ、その指示対象を変化させる過程にこそ、非日常的な神秘体験を迫体験する、あるいは「語りえぬもの」に肉薄する手がかりを見いだすことができるのかもしれない。

神秘体験をした人間だけがそれについて語るができるというわけではない。たとえそのような体験を経ずとも、メタファーによってそれについて語ることは可能である。現に、特定の宗教伝統内においては、それについて語り合い、理解されている。そしてそれが信仰のよりどころとしての「聖なる言葉」となっている。「文字にできないはずの言葉」が、明らかに特定の人の内面には現実的な描写を伴って生きつづけている。

われわれの関心は、証明よりも概念的な可能性を求めるところにあり、われわれが神を定義すると主張せずに、神について語り、そしてそれをメタファーを用いて行うことを正当に主張することにある。リアリズムは直接的に記述すると主張することはないが、現実描写である言葉のあやを包含する。(ソスキース、小松訳、1992:257)

ソスキースは、宗教言語とメタファーの関係から、宗教的な体験は、それそのものが本質的であり、またその共同体そのものも本質的であると考えている。様々なメタファーを通じて、その指示概念が現実的な描写として確かに読み手に認知されると強調している。

しかしながら、語の意味とその指示は社会的文脈に依拠しているので、メタファーによる伝達には、その曖昧さがために、語の類似性や関係性などが社会においてすでに共有されていなければならないという前提条件がある。翻訳上、異なる言語や文化圏においては語の関係性や類似性が欠如している場合があり、それが独り歩きして間違った描写を提示してしまう恐れもある。言語の背後にある諸要素を考慮し、「語りえぬもの」を語るために翻訳者は思索を重ねる。それはメタファーによる試作であり、詩作でもある。

[引用文献]

- A.J. エイヤー (吉田夏彦訳) 『言語・真理・論理』岩波書店、1955年。
J.M. ソスキース (小松加代子訳) 『メタファーと宗教言語』玉川大学出版部、1992年。
Sallie McFague, *Metaphorical Theology-Models of God in Religious Language*, London: SCM Press, 1983.
P. ティリッヒ (土居真俊訳) 『組織神学 第三巻』新教出版社、1984年。